

17期ミニミニ同期会 in ウランバートル

あるいは 蒙古放浪Pw

17期 小島 敬

【日程】 2019年6月26日～30日〔4泊5日〕

6/26 成田⇒ウランバートル

6/27 ウランバートル⇒カラコルム(カラコルム博物館、エルデニ・ゾー寺院)《ゲル泊》

6/28 カラコルム⇒ウランバートル

6/29 ウランバートル市内(メルクール市場、恐竜博物館、国立ドラマ劇場、モンゴル料理)

6/30 ウランバートル⇒成田

【参加者】 大家夫妻、杉本夫妻、小島〔計5名〕

これは17期のウランバートルでのミニミニ同期会(大家、杉本、小島)の記録です。発端は、2018年秋の松本・美ヶ原高原での同期会でした。そこで、杉本君が2019年4月からモンゴル国立大学に招聘されるという話が出て、それなら来年の同期会はモンゴルだ、ということになりました。

モンゴルは、ワングルに入部して『蒙古彷徨の歌』を聞いて以来、ずっと気になっていた国です。当時のワングル歌集には「四高寮歌」や「南下軍の歌」、「蒙古彷徨の歌」などが載っていました。どれも古色蒼然としているけど新鮮でした。特に「♪心猛くも 鬼神ならで、男と生まれて情はあれど」と始まる『蒙古彷徨の歌』は壮大な大陸へのロマンが感じられました。いったい蒙古とはどんなところなのだろう、と思っていました。これは行って確かめるしかありません。

出発日に成田空港に集まったのは大家夫妻と小島の3人だけでした。皆さん、仕事の都合、家庭の事情、個人の嗜好(羊の肉が食べられない等)があるので仕方ないことです。成田からウランバートルまで直行便で5時間。飛行機は中国の北京上空から西北に向かい、万里の長城を越えました。眼下に見えてきたのは内モンゴルのゴビ砂漠。地平線まで続くゴビ砂漠は圧巻でした。モンゴル領空にはいると緑が徐々に増えてきました。木々は無く、ただ草原が広がっています。大地が濃い緑の絨毯に変わるころ、機体は高度を下げ、チンギス・カン国際空港へと着陸態勢にはいりました。

1. 草原の国を走る(ウランバートル → カラコルム)

蒙古放浪といきたいところだが、地理感のない僕ら(大家夫妻+小島)がレンタカーでカラコルムを目指したら、放浪どころか迷子になって行き倒れること必定。メカにも弱いので、途中で車が故障したら間違いなく立ち往生。ということで、カラコルムへは車とガイドを手配した。

きょうの気温は10℃～20℃。この時期はよく晴れるそうだが、日頃の心掛けのせい、晴れたり曇ったりのはっきりしない天気だ。ホテルへ迎えに来てくれたのは、日本語ガイドのジャガさん。彼女は日本語をモンゴルで覚えたというが、日常会話では困らない達者なレベル。運転手はウル・ジーンさん。車は、現代自動車のグランド・スタレックス。座席は3シートなので余裕だ。カラコルムはウランバートルから西へ350km(東京～名古屋の距離)。草原の中の一本道をひた走る。舗装されてはいるが、かなり痛んでいる。熟練ドライバーのウルさんはところどころ路面の剥がれた道路を時速130kmで突っ走るので、上下左右前後に激しく容赦なく揺れる。悪路で酷使されてきたせいか、とうとう途中で後部ドアが開かなくなった。ウルさんとジャガさんが二人がかりでやっと開いた。もう買い替え時ではないのか。

たおやかな丘が続いている。緑色の濃淡が異なる草原が、どこまでもどこまでも広がっている。ゲル(移動式住居)が点在しているのは、いかにもモンゴルだ。ときおり、はるかかなたを家畜の大群が移動していく。まさに「草原の国」だ。



<草原>

数10km間隔でガソリンスタンドや小さな村がある。時々トイレ休憩で停めてもらう。ある場所

で入ったトイレは生涯忘れられないものとなった。道路わきに、いかにもタダですという風情で無造作に建っている板張りのキジ場があった。有料トイレは遠かったので、やむなくここを使うことにした。大家君が先にはいり、入れ替わりで僕が使った。劣悪な環境のキジ場には山小屋で慣れているつもりだったが、これは想像を絶していた。こんなおぞましいキジ場は初めてだった。どうやって掘ったのか深さ5mはあり、暗くて底が見えない。すさまじい瘴気が湧き上がってくる。蠅すらも生息できないのか生命の気配はない。大家君は3回嗚咽したというが、僕も悪臭で意識を失いかけた。足元の板も危なっかしく、何度もバランスを崩しそうになる。失神したら奈落にまっさかさまだし、きっと誰も助けてくれないだろう。必死で位置を確保して用を済ませ、車に戻った。

2. モンゴル帝国の都・カラコルム

1220年、チンギス・カンの命でカラコルムに都が置かれた。2020年は建都800年だ。行政、文化、宗教、国際交易の中心地として栄えた。城郭に囲まれた都市だったが、今は跡形もなく草地が広がっているだけだ。

カラコルム博物館（日本の無償援助で2011年開館）を見学する。女性の研究者がわざわざ館内を案内してくださった。メインホールには、往時の国際都市の巨大なジオラマがあった。モンゴル帝国が宗教に寛容だったことを示すように、多くのイスラム教寺院や仏教寺院、キリスト教会などが再現されていた。カラコルムには、遠方のヨーロッパや中東からの商人なども大勢住んでいた。彼らにとって自分の信仰する宗教の建物があるのは救いだ。心の安寧を求めて人々は宗教施設で祈った。異国の地でも宗教的な支えがあれば、安心して自分の生を全うすることができただろう。

遺跡の南にあるチベット仏教のエルデニ・ゾー寺院は広さ500㎡、寺域は正方形で108の仏塔に囲まれている。廃墟となったカラコルムの石材を使って16世紀に造営された。欄干、手すり、階段などに碑文が刻まれた石も使われた。廃材利用で作られた寺院だったのが幸いして、これら碑文の解読によってモンゴル史研究が進んでいる。

20世紀初頭、西欧列強の関心が中央アジアに集

まる中で、日本は浄土真宗西本願寺派が大谷探検隊を三次に渡って送り込んだ。第二次大谷探検隊はカラコルムに滞在（1908年）しエルデニ・ゾー寺院に宿泊した。巨大な伽藍がいくつもあり壮麗な眺めだったことが記録されている。



＜華やかで美しい民族衣装＞

「京都の舞妓変身プラン」のカラコルム版。モンゴル人の若い女性観光客が、お姫様になりきっている。（エルデニ・ゾー寺院の入口で）

3. カラコルムでゲルに泊まる

カラコルム郊外、40戸ほどのゲルが並ぶ大規模なツーリスト用キャンプに泊まった。このゲルには、何故か中国のチベットからやって来た若い男性修行僧の集団も泊まっていた。エルデニ・ゾー寺院でラマ僧の研修でもあるのだろうか。彼らはスマホで自撮りしたり、広場に集まってお喋りしたりして、とても楽しそうだった。

大家夫妻とは別々のゲルへ。1人用は犬小屋のような大きさかと思っていたら、普通サイズのゲル（シングルベッドが三つ）で安心した。ゲルは直径5m、高さは優に3mはある。テントのように狭くないし天井が高いので圧迫感もない。羊毛のフェルトで覆われ暖かい。トイレ、シャワーはないが居住性は抜群だった。天窓から光がはいる。放射状に張り渡された梁が日時計となるそう。

ゲルは必ず南向きなので、ゲルから出て左が東、右が西となる。モンゴル語では左と東、右と西は同じ単語だ。彼らが古代からゲルで暮らす遊牧民であることが言葉に表わされている。

夕食はレストラン棟で。外国人用にアレンジしたコースが出た。きのこのスープ、ポテトサラダ。メインは焼肉入りのスパゲティ。デザートはヨー

グルト。きのこスープは昼も出たが、きのこに癖がなく、やさしい味がしておいしかった。



＜ゲル内部 中央左が暖房用煙突＞

夜はスタッフが来てストーブに火を入れてくれた。3人でその様子を観察する。まず練炭をたくさん入れ、その上に薪を乗せてバーナーで点火する。中央の煙突から換気される。外に出てみると各ゲルから煙がもくもく出ていた。大家夫妻のゲルはすぐ暖かくなった。子供のころからゲルに泊まるのが夢だったという大家君は大満足だ。一酸化炭素中毒が怖い僕は、火の気のない自分のゲルに戻り、持参のシュラフで寝た。

現代の遊牧民は電気を太陽光発電でまかない、BSのパラボラアンテナで衛星放送を見る。日本の横綱白鵬や鶴竜の活躍も、ゲルで見ていることだろう。テクノロジーの進歩は、遊牧民が一番享受しているかもしれない。数百km離れたウランバートルの銀行口座の資金移動はスマホで簡単にできる。ネットとGPSでゲルの現在地を特定して郵便物を配達するサービスは既に始まっている。ドローンを使ってゲルに荷物や郵便物を配送する時代は、そんなに遠いことではなさそうだ。

4. ウランバートルを歩く（ミニミニ同期会）

6月29日（土曜）。きょうは一日、杉本夫妻にウランバートルを案内していただく。17期のミニミニ同期会だ。天気は晴れ。杉本夫人によれば、

冬枯れで色彩の無かった街は6月になって一斉に木々が芽吹き、あつというまに緑一色の装いに変わったそうだ。僕らが訪れたのは、まさに初夏のウランバートルだった。移動手段は徒歩とバスだ。タクシーは白タクなので僕ら外国人には使いこなせない。満員のバスに乗り込んだら、すぐ席を譲られた。生まれて初めて譲られた席に、とまどいながらも、ありがたく座らせてもらった。

最初に連れて行ってもらったのは、市内有数の規模を誇るメルクール市場。露店ではなく大きな建物の中にたくさんの店が並んでいる。金沢の近江町市場みたいだ。にぎやかで活気がある。調味料、缶詰、干物などの加工食品。畜肉や野菜、果物などの生鮮食品。国内外からの様々な食品が売られていて、見て回るだけでも楽しかった。食材を手に入れるため杉本夫人もよく訪れるそうで、市場の中を隅々まで知っていた。

お昼はホテル近くのイタリア料理店で。杉本夫妻から現地での仕事や暮らしぶりについて話を聞いた。事前に奥さんから日本食を持参してほしいと依頼されていたので、異国で食べ物も合わず苦勞されているのだろうと勝手に想像していた。ところが会って吃驚、とても活発な奥さんだった。羊の肉が苦手なだけだった。ウランバートルに着いてすぐ日本語学校でボランティアを始め、ひとりでバスを乗りこなし、モンゴル語はできなくてもジェスチャーと度胸でコミュニケーションを取り、楽しい毎日を送っていたのだ。

5. 恐竜博物館でゴビ砂漠の恐竜化石を見る

博物館前で大家君が着ているのは、ワンゲル60周年記念Tシャツ（次頁の写真参照）だ。最初、誰も図柄が何かわからず、縦書きのモンゴル文字ではないかという説も出たが、よくよく見れば登山靴をデザインしたものだった。

モンゴルと言えば恐竜。卵の化石が世界で初めて発見されたことでも有名だ。館内にはゴビ砂漠で発掘された恐竜化石が展示してあった。

ハンマーのような尾の先端が特徴のアンキロサウルス（植物食）。同種のサイカニアの頭骨。サイカニアは植物食だけど鬼のような形相だ。きっとこの顔で肉食恐竜を寄せ付けなかったのだろう。他には、タルボサウルス（肉食）、ミノ

タウラサウルス（肉食）、プロトケラトプス（植物食）、オビラプトル〔卵泥棒〕（雑食）など。



＜恐竜博物館前で同期3人（小島、杉本、大家）＞

6. モンゴルの歌舞音曲を楽しむ

杉本君が国立ドラマ劇場（1931年設立）の切符を手配してくれた。それにしても、卒業して40数年後にこのメンバーでモンゴルの民族芸能を鑑賞する日が来ようとは、想像すらできなかった。金沢の安下宿で文化とは程遠い生活をしていた僕らも大人になったものだ。舞台では演目が次々と変わり、飽きることがなかった。1人は半分寝ていたが、他の4人は熱心に最後まで観ていた。

ホーミー（モンゴル喉唄）、オルティンドー（モンゴル民謡）、馬頭琴（草原のチェロ。二弦だけで、どうしてこんなに情感あふれた演奏ができるのだろう）、コントーション（軟体芸。女性二人の組み技。背骨が折れるのではないかというほど極限の柔軟さを表現）、ビー・ビルゲー（少数民族の舞踊。両肩を規則的に力強く上下させて騎馬の躍動感を出すなど、ダイナミックな踊りが多かった）、仏教仮面舞踏ツァム（多彩な守護神が登場。守護神「白い老人」の仮面の表情がワンゲルOBの某先輩にあまりに似ているので驚いた）。

最後は伝統楽器（馬頭琴、琴、三味線、ラマ笛、角笛など）のオーケストラ演奏で締めくくり。モンゴルは豊かな文化を持つ国だと思った。

7. モンゴル料理を食べる

意外だったのは、ジンギスカンがないことだった。ジンギスカンは日本の焼肉料理なのだ。

夜は杉本夫妻が洒落た雰囲気のレストランに連れて行ってくれた。前日の夕食は火鍋（Mongolian Hot Pot）だったので、他の料理を注文した。ボーズ（ひき肉を小麦粉の皮で包んで蒸したもの。小籠包に似ていて、いくらでも食べられる）、ホーショール（ひき肉を小麦粉の皮で包んで揚げたもの）など。「モンゴル行くなら、とにかく馬乳酒だけは飲んできて」と息子に言われた大家君だが、馬が出産を終え搾乳可能な8月～9月の期間限定品とのこと。馬乳酒のカクテルなら作れるというので試しに1杯だけ頼む。少し飲ませてもらったが、ほのかにカルピスの味がした。そういえば、カルピスは2019年7月7日に発売100周年を迎えた。創業者三島海雲は、内モンゴルで出会った酸乳（発酵乳）にヒントを得て、試行錯誤を繰り返しカルピスを作ったそうだ。

8. 『蒙古彷徨の歌』の舞台は何処だったのか？

モンゴルへ行ったけど、「草原の国モンゴル」と『蒙古彷徨の歌』に出てくる「蒙古の砂漠」がどうしても結びつかなかった。蒙古放浪の舞台は、外モンゴルではなく内モンゴルだったのだ。

外モンゴルでは1921年に人民革命が成功し、1924年に独立した。日本で『蒙古彷徨の歌』が流行し始めたのは1920年代と言われている。大陸へ本格的に乗り出した時代だが、すでに社会主義化した外モンゴルに日本の影響力はない。当時の人々は、日本の覇権が及んだ満州と内モンゴルを「満蒙」として捉えていた。『蒙古彷徨の歌』がこの時代背景から生まれたとすると、歌に登場する砂漠は、万里の長城の北に広がる、大陸浪人や馬賊が跋扈した内モンゴルの砂漠だ。

杉本君がいなければ、まったくご縁の無かったモンゴル。今回、杉本夫妻と大家夫妻のお陰で、貴重な面白い体験をすることができました。同期の仲間にはありがたいと、改めて思いました。